救急科第78期
～実践的な教育訓練の実施について～

消防大学校では、専科教育において、救急隊長及び救急業務に従事する指導的立場の職員に対し、高度の知識と技術を総合的に修得させ、救急業務の幹部及び指導者としての資質を向上（指導救命士養成教育を含む。）させる事を目的に「救急科」を設置しています。

本年度の救急科第78期は、全国から集まった48名が専門的な救急知識はもちろん、訓練企画能力や現場指揮能力の向上、教育技法やコミュニケーション技法など指導者としての能力を高めるための教育を９月６日から10月７日までの32日間にわたり実施し、全員が無事卒業しました。

今回は、救急科において実施した、実践的な訓練として「技能管理（訓練企画）」と「多数傷病者対応訓練」について紹介します。

学生による訓練立案

訓練実施日は、想定を付与する想定班と、その想定に基づき訓練を実施する実施班、訓練を支援する支援班に分かれ、想定班の学生の運営により訓練を実施しました。

１　技能管理（訓練企画）

救急救命東京研修所の徳永教授を講師に迎え、効果的な訓練の企画から始まり、訓練想定の立案、資器材の選定、訓練会場の設営から、運営、最後に検討会に至るまでを学生が主体で計画し、訓練を受ける側ではなく、訓練を行う側の立場での指導能力の修得を目的に、座学３時間、訓練企画の立案、準備等に７時間、６想定の訓練を７時間実施し、合計で17時間の講義並びに訓練を行いました。

企画・運営訓練の様子

徳永教授の講義

検討会の様子

2　多数傷病者対応訓練

消防大学校では、幹部科、警防科、救助科、救急科のそれぞれの授業の中において、多数傷病者対応について座学、机上訓練、実働訓練を合計で９時間実施しています。

今回の救急科の多数傷病者対応訓練の実働訓練については、救助科との合同訓練としたことから、総員108名、実動車両10台、仮想車両６台という、これまでにない大規模なものとなりました。

さらには、今までの実働訓練では、現場に要請する医師を学生の係員が仮想で実施していましたが、今回は、実際に東京ＤＭＡＴとして杏林大学の医師２名と事務員１名に参加いただき、現場において医師とどのように連携するかを具体的に訓練することができました。

机上訓練の様子

実働訓練の様子

訓練では、まず座学（２時間）において多数傷病の定義から、活動全般の流れを確認。その後机上訓練（３時間）において、先着隊、指揮隊、消防本部などに分かれた学生が、それぞれ事故発生から、傷病者を医療機関に搬送するまでを映像による想定付与に基づき各隊長の判断により活動を行います。そして最後に実働訓練（４時間）において実際に大型バス等の車両を配置した多重衝突による交通事故、不特定多数の多くの人が集まる会場で何らかの爆発物が爆発したとの２つの想定の下、車両に乗車し出場、現場救護所の設営、トリアージ、医師との連携、情報管理、搬送病院の選定などを行い、現場における指揮能力、部隊運用、トリアージ対応能力の向上を目指しました。

医師との連携

実働訓練の様子

訓練を終え、学生達からは、多数の部隊が集まる中での災害実態の把握と部隊管理、傷病者情報の把握などの困難性がよく分かり、改めて訓練の重要性が認識できた。実際の医師から現場において医師とどのような連携が必要になるかを直接指導していただき勉強になったなどの意見がありました。

救急科第78期を卒業した学生たちは、今後、消防大学校で修得した高度な知識・技術に加え、得られた全国の情報を活かし、若手の育成、医療との連携、業務高度化への対応等、様々な場面での活躍が期待されています。

問合わせ先
消防大学校教務部　白子助教授
TEL: 0422-46-1714